



河津抄卷第十八

正六休上物語博士源惟長

米三十石



大石 わせのつれなることとてはしむるをいふは
米のつれなることとてはしむるをいふは

みやうのつれなることとてはしむるをいふは
米のつれなることとてはしむるをいふは

いふはつれなることとてはしむるをいふは
米のつれなることとてはしむるをいふは



1272
18

河海抄巻第十八

正六位上物語博士源惟良撰

才三十絶句



春后

わな海はなること英とじとをこらん
あやしくとく海よりりもわくゆん



みやがうりいしこみりてあててもつるあや

右介

右香系 物志札字角結書海也

あやしくとく海よりりもわくゆん

りそり

いひひくるもはるり

あやしくとく海よりりもわくゆん

あやしくとく海よりりもわくゆん

あやしくとく海よりりもわくゆん

松海... 宿^宿... 後^後... 不動

不動

世中... 顕徳

くもか... 仙人

仙人の雲霞を裳文選

雲是准と毫...

本外

に... の...

菟歌

法同... 菟... 月... 齒透

齒透

あふ人... 秋... 思... 秋...

蟋蟀居壁 月令

遠壁暗壁之限 葱巢寒鶯未結 樂

かきとく川魚はららとく

路くはかきとくこころは海舟とまかりし

らわらぬ人くうららぬくくくくく

進心 日本

あやふくはくくくくくくくくく

にありてはくくくくくくくくく

かきとくくくくくく

なる

あやふくはくくくくくくくくく

くくくくく

あやふくはくくくくくくくくく

あやふくはくくくくく

如国 勅

あやふくはくくく

あやふくはくくくくくくくくく

又尾とくくくく

あやふくはくくくくく

伊藤也

あやふくはくくくくくくくくく

申借 ありき

あやふくはくくく

難役

あやふくはくくくくく

あやふくはくくくくく

六折 貫之

りら葉なる道し海ありまの白雲をいふる日

いんげん

わらわの魂紅葉をわけて海日影のみる時をて

ふとわがこころようこころ起るこころ紅葉の魂をわけて

はらわこころの魂ありけりありけり

わらわのこころよ 伊り天

て人いふるもはら魂月影のあつたふとわこころをて

こゝろもあつたこころをわけてこころをわけて

人いふこころをわけて

日まはれ魂えんりのこころをわけてこころをわけて

伊魂物終昔男いりりよのたつこころをわけて

うらわの魂よあつたこころをわけて人いふこころをわけて

こころをわけて

物終るこころをわけてこころをわけて

琴の事 伊魂物終るこころをわけて 在大和物終るこころをわけて

うらわの魂よあつたこころをわけて

葉也并也

これ終るこころの魂をわけて

はらわこころの魂をわけて

他國

はらわこころの魂をわけて

九華懐源秋情 反魂もあつた人魂 夫人の魂

在何許名 櫻門 刈焚もあつた 白氏文集

李夫人の魂をわけて 後漢武帝甘泉殿の裏よ

はらわと萬しり方古として 八雲集と合して

金炉小 焚くこころをわけて 名もあつた 櫻の中は夫人の魂

事也

あつたこころの魂をわけて

あはれなる我身こそいつくぬかりある人こそ悲し
たさうたしこののちよりいふ

まろくゆきまふと結をわきまわさる情に命とり
か袖をほろろとふるることまかりせん

伊あしと昔の約束もか袖をほろろと
みらんくたはほろろのちりあはれ

^{拾遺}あさり色^丸の若ふと母さる昔の約束もあはれ
あさり色^丸の若ふと母さる昔の約束もあはれ

くはははは
切符らんちり

この川より
近雷

法師の入六人してあはれこれ合はんはうより

何れ改の合はんとあはれ
常不悔とらんは^{疑はる}あはれ

秋深敬汝等不敬悔悔取以忘何汝等皆然
善薩道當得他佛 法師不悔芥末

釋を周後女不悔芥末してい女字入借と唱
てて女と礼深しは一切家生は性ある也

あはれ
あはれ

あはれ
あはれ

あはれ
あはれ

廻向

服二月の終り何事かおぼえはしむるは
又母の服たつていふ事なむり海に包あこ
こららと海とち也

申乃文の海もももかこめは海乃らあはたわ
色たわらぬこと

色ふかき河洞の川はわと茶わら河の奇絶
いり富いおとをゆわむと茶わら河の奇絶
故婦看る也

屋と紙のれしこたふらあつて也

今北去年節ト河らあこ物も人まん里さうたさうあ
いおやと紙のれしこたふらあつて也
まじうらうとら紙のれしこたふらあつて也
月あわらうとら紙のれしこたふらあつて也

鏡乃と海乃とてはなれもたら鏡あつては
昔のつと所もはなれも

五月の初鏡らうとあつては昔人の袖た
袖乃梅いさうと白あつて袖らうらうと
おれしに教たり鏡とて海らうと海の
いよまらうとらゆらうのらは

あつては月とてははの袖あつては月とては
あつては月とてははの袖あつては月とては
あつては月とてははの袖あつては月とては

あつては月とてははの袖あつては月とては
あつては月とてははの袖あつては月とては

あつては月とてははの袖あつては月とては
あつては月とてははの袖あつては月とては

田畠 又高麗 文選 又周白氏文集 又胆脂

志ふてり、来りて人の思存歎かてり、同心類白成文集に
湖光電を出事類前葉よ志るてりやるあはれは
河さやうり行てり、の境海あり

式又新法よめり、塔とて、つらつらとせよ、
つらつらと海あり、腐也

二葉院の橋と入る、橋よわるる、橋よわるる、
やられ多く、いんをとてやる、記りありあはれ

若ふも、つらつらと、地橋、頭ん、地とて、
つらつらと、つらつらと、つらつらと、

つらつらと、つらつらと、つらつらと、

實

芽三十二 宿本

巻名

一名白鳥

かかり、大勢とて、つらつらと、つらつらと、
つらつらと、つらつらと、つらつらと、

つらつらと、つらつらと、

銷日不如其石

延長七年正月、自山記、朝親、又、山日、還、山、河、の、案、集、
園、基、物、終、物、を、好、馬、則、召、基、を、或、る、親、と、な、大、
基、其、間、山、既、別、當、去、野、卒、鹿、毛、山、馬、立、延、中、
一、局、給、た、大、臣、勝

つらつらと、つらつらと、

水西の女房の居候とて方違ふて此方より
色い故也内の方より内家内房等々也
なすのれ家といふと云うてはとては
よ君信新婚庵縁附女シヤ蘿シヤ 古約

松蘿契夫妻とては也 伴行尺奥入水原下
一同案すこれ中云乃初也女乃るるありてけ
友のら公つてとありと約類の本亦有て
可紀付

庭も留り候とてはとては何れとては
里古のあまこく人らりては富貴とては
之院乃る女信くりら二三年より此とては
一とては院也と六条院より也
六條院道也と始々事付初とては
桂院又栖居も候

毛詩云水堂栽萱草結云憂

こつとては萱草とては草也後者此
くこも此草也いかに秋信とては
世乃る此とては人といふ也

ふ里古の也とては事とては何とては
そ大ゆりてとては古道也
いりてとては

伊くりとてはわら身とてはとては

あまのつとては葉也
人といふとては人信 遊仙書

いりてとてはとてはとては

秋の風はさびしき心にしるすも
三升の葉のよきしはらりてたかゆ

家母のいふもりのあはれを
月よかしの物とつて

後撰十卷の月よかしのあはれ
か人のありきねの 後人よき

秋の風はさびしき心にしるすも
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

あつらひのよきしはらりてたかゆ
あつらひのよきしはらりてたかゆ

ありけりるるの約こりもれとる
いふなるもやういふなり
いふなるもやういふなり
いふなるもやういふなり

あつたるもやういふなり
あつたるもやういふなり
あつたるもやういふなり
あつたるもやういふなり

不足^ニ礼中^ニ偏愛^ス菊^ヲけ花^ヲ用^シ後更^ニ云^フ元禎
西宮左大臣庭前高物段后樹上院前小児詠
此の教作者之半意を字を語琵琶技秘年
曲小児醒入^ノ庭蓮武也^也
又天人比也と云ふ物なり

伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ

伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ

伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ

伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ

伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ
伊豫乃らんうらみ

心 志 乃 身 之 主

銀揚器 武藥器 祝行祝

進食 日本紀才七案之若稱唯事歟

漢書云女子之曰 復曰如淳曰云羊傳曰天子嫁女必

復必使佐侯同姓之故謂之云有官表列

後取食曰國皇后之曰而食曰邑帝姊妹曰長云

正之位源朝信樂作有跪臥天皇之女也云

選舞未得其人大改大臣正位者原朝信良房初

系之時天皇視其風操超倫殊物嫁之

云云進食之曰云云

天下

かえり月地

才一とふら

二の月地ありと思わんとす

延在河野

延在河野

藤よ新蔵者代号あり

藤よ新蔵者代号あり

金造

金造

金造

金造

金造

金造

舟に居るも也みよこれの傍に居るのよから也
わくわくといふかきしは
あゝ海にさす也

舟に居る

良見しとくとも也

わくわくといふかきしは

若苗文

いほくくあるれり

泉川

イハシカハ
泉川は河とて也見記。他河とありと律の五毛り
通らう也果林天皇教兵川と申にうら
池戦ありし也

初ていさよみ此東の河川をさう衣をさ

遠舟子ワタ 文選才二

去來とて人と 退

みよこれあつり 沖流取

あつりといこり 玄期

ゆらゆらとくみ神とていふはつてふもはるん
沖流取

取金銀銅合者折其半按使者曰為我謝太上皇

謹於是物召而好也 長恨奇傳

かゆりれ物とていふはつてふもはるん

かかぬは物とていふはつてふもはるん

かかぬは物とていふはつてふもはるん

かかぬは物とていふはつてふもはるん

毛詩曰流離少而貞好老甚醜

故集鳥乃一名と貞とていふ也

或説云杜少卿かかぬはつてふもはるん



